現代日本社会における家族の研究

—望ましい第１次社会化を求めて—

A Study of the Family in Modern Japanese Society

—In Search of the Desirable First Socialization—

小　島　一　夫

Kazuo KOJIMA

Abstract

Since the advanced economic growth in 1960's, our styles of living have been changing extremely fast, and we can see the very situation that the materialism drives out the spiritualism. This matter causes some grave social problems.

Many researchers know that some phenomena like domestic violence, infant ill treat,bully in school and so forth, which are thought to be educational and social problems of recent Japanese society, come from unnatural relationship between family members.

So I put a subtitle — In search of the desirable first socialization — and stated the research of modern Japanese family from following four points of view. (1) Some social problems over the infant (2) Transition of family form (3) The first socialization in the development psychological and educational sociological side (4) Parents' behavior for the desirable first socialization and issues to be solved.

Keywords; The first socialization, Social problem, family (home), evelopment

要　約

1960年代の高度経済成長期より，生活環境(様式)がめまぐるしく様変わりし，まさに「物質文化」が「精神文化」を駆逐する観を呈している。このことが，由々しきいくつかの社会問題を引き起こしている。

そして現代日本における教育的，社会的問題と言われるドメスティック・バイオレンス，幼児虐待，いじめ等の諸現象が家族成員間の人間関係に起因しているという事に多くの研究者たちは異を唱えない。

そこで本小論は，「望ましい第１次社会化のために」というサブタイトルを付けて現代日本における家族の研究を四つの視点（１．幼児をめぐる社会問題　２．変容する家族の形態　３．発達心理学的，教育社会学的面においての第１次社会化　４．望ましい第1次社会化のための親の態度と今後の課題）で論述したものである。

キーワード；第１次社会化，社会問題，家族（家庭），発達

1．緒　論

筆者は付属保育園の英語指導を通じて，園児たちの多くが，望ましい（第１次）社会化がなされていないという事実に直面した。

社会化（Socialization）とは，潜在的な可能性をもって生まれた人間が，社会すなわち具体的さまざまな集団の文化を内面化し，共同生活を営めるようになることを言う。それは生涯にわたって継続する[1]。そして第１次社会化とは出生家族や近隣集団などの第１次集団*での生活を通じてそこでの価値観を強く反映して行われることを言う[2]。

またこの社会化の過程は，人間の先天的な素質を土台として，家族に始まる集団生活が蓄積してきた価値体系，行動様式としての文化を内面化することによって形成されるパーソナリティーと同意ものである。

日本の家族形態も時代とともに推移し，それに伴って家族問題も変化している。戦後の復興期において家族問題は主に物質的条件の確保における問題であり，労働力・貧困問題に吸収される性格であった。高度経済成長期においては，親子の断絶的様相と過度の密着，夫婦間のコミュニケーションの不足や役割分担のアンバランス，生活時間配分のアンバランスや余暇活動問題など，単なる経済的問題に還元できない人間的諸活動をめぐる問題が多様に噴出してくるのがこの時期である。「ポスト成長期」とでもネーミングされる最近10数年間についての家族問題は高度経済成長期でのそれと大きな違いはない。しかし，問題現象として現れないところでの深刻化あるいは「潜在化」こそが特徴である[3]。

そこで，家族（家庭環境）を知ることが，幼児の行動を理解するうえで必要不可欠であると言える。幼児たちにとって家族の影響は良くも悪くも絶大である。ゆえに，家族を理解し，家族関係を改善することが幼児をめぐる様々な問題解決に必須となる。さらに，シングルマザーと言った片親の家族構成内にいる幼児をあずかる保育園（所）の連携も重要な役割をもっている。そして，諸々のしつけをはじめとして保護的要素を多分にもった保育園（所）は，まさに前述の第１次集団に属するとも言える。

そこで本小論は，第１次社会化に多大に関与する家族を(1)幼児をめぐる社会問題　(2)変容する家族の形態　(3)発達心理学的，教育社会学的面においての第１次社会化　(4)望ましい第１次社会化のための親の態度と今後の課題という４つの視点で論述を試みたものである。

2．幼児をめぐる社会問題

科学的見方としての社会的問題といえば，社会問題＝労働問題というのが長い間支配的であったし，高度経済成長以前はそれでおおよそことたりていた。しかし高度成長を１つの契機として，

＊クーリー（C. H. Cooley）の作り出した概念。それは直接的接触のもとづく成員間の密接な関係とこれにもとづく協働とを特徴とする集団をいう。［塩原勉他編「社会学の基礎知識」p34有斐閣（1969）］

日本の社会問題が多様化・複雑化してくる。いわゆる「新しい社会問題」が噴出してきたのである。この「新しい社会問題」に対して真田是は，新しい現実に応じた新しい把握にもとづく社会問題の分類や，個人レベルと社会レベルの両方を視野におさめた「行為としての社会問題」と「状態としての社会問題」という概念を構築した[4]。

本論は，人間の問題である「新しい社会問題」とりわけ「行為としての社会問題」の幾つかをとりあげた。

(1) ドメスティック・バイオレンス（DV）

家庭内で起きる暴力，特に配偶者やパートナーに対する暴力はドメスティック・バイオレンスと呼ばれている。家庭という閉じた空間で起きるため，被害者は逃げ場がない。また，警察に連絡しても警察は「民事不介入」を理由になかなか介入しようとしない。このような警察の姿勢に対していろいろな方面から問題提起がなされ始めている。家族形態が核家族化し地域の連携が希薄となった日本の社会では，この問題は「夫婦喧嘩は犬も食わない」といった悠長な問題でなく，死と隣り合った危険性の高い社会問題となっているのである。

レノア・E・ウォーカーは『バタードウーマン　虐待される妻たち』（斎藤　学監訳，穂積由利子訳，金剛出版）という本を著しドメスティック・バイオレンスの問題に警鐘を鳴らしている。

バタードウーマンとは男性（夫）の常習暴力によって心身がぼろぼろになった女性（妻）のことを指す。著者のウォーカー博士は女性虐待の研究の先駆者であり，アメリカではこの本（1979年の著作）がきっかけとなってバタードウーマンへの理解が高まり，避難所（シェルター）の設置や法律の制定にまで影響を及ぼしたといわれている。

またウォーカー博士はその著の中で「サイクル理論」を提唱している。サイクル理論を簡単に解説すると，ドメスティック・バイオレンスというのは「第一相　緊張の高まり・第二相　激しい虐待・第三相　優しさと悔恨そして愛情」という３つの相を繰り返すのだという理論である。わかりやすく説明すると，第一相「緊張の高まり」では，夫は妻へ嫉妬を向けたり，孤立感に悩んだりしながら次第にピリピリと緊張感を高めていく。それを察知した妻は何とか夫の機嫌をとろうとするが，結局はどうにもならない。第二相「激しい虐待（暴力）」へと展開する。こうなると妻はなす術はなく，命からがら夫のもとを逃げ出すしかなくなる。問題は次の第三相「優しさと悔恨そして愛情」の段階である。荒れ狂った夫は，今度は手のひらを返したように謝罪するのである。そして妻は夫のすむ家に戻りまた第一相から始まるのである。結局，夫の暴力は改善されない。やがて，妻は疲れ切って，夫のもとから逃げようという気力すら失ってしまう。学習性無力感に陥ってしまう。これが「サイクル理論」のアウトラインである[5]。

こういう家庭環境で育った幼児の多くになんらかの精神的疾患（障害）があることを精神

病理学や臨床心理学での膨大な数の事例がものがたっている。後述するアダルト・チルドレンもそのひとつである。

(2) 児童虐待

児童虐待の問題が年々増加の一途をたどっている。その背景には，都市化，核家族化，少子化，情報化といった現代的な社会状況が存在している[6]。特に核家族化が進んだ家族形態の中では，親のストレスはまず一番身近な対象に跳ね返る危険性がある。それは配偶者であれば前述のようなドメスティック・バイオレンス，そして子どもであれば児童虐待となるのである。

虐待の定義については「児童虐待の防止に関する法律」第2条に示されている。それを要約すると，子どもが親または親に代わる養育者から，身体的・精神的・性的に危害を加えられたり，適切な保護（世話や医療）が与えられなかったりすることをいう。これまで一般的に次の4つのタイプに分けて考えられてきた。

1．身体的虐待；通常の躾や体罰の限度を超えた暴力により身体的に損傷を生じさせること。時には死に至る場合もある。

2．心理的虐待；非難，拒否，無視，脅迫，ほかの子どもとの差別など心理的な苦痛を与えることで，心身の発達をそこなうこと，あるいはそのおそれが大きい状態をいう。

3．養育の放棄・拒否；子どもの健康と発達に必要な衣食住の世話をしなかったり，病気や怪我をしても医療を受けさせなかったり隠したりすること。

4．性的虐待；性的ないたずらをしたり，性行為を強要すること。子どもを家に閉じ込めて登校させないことも虐待と考えられている[7]。

(3) いじめ

文部省（現文部・科学省）は「いじめ」を「自分より弱いものに対して一方的に，身体的・心理的な攻撃を継続的に加え，相手が深刻な苦痛を感じているものであって，学校としてその事実（関係児童生徒，いじめの内容等）を確認しているもの。なお，起こった場所は学校の内外を問わないものとする」を定義して件数を把握している。（文部省初等中等教育局中学校課「生徒指導上の諸問題の現状と文部省の施策について」（平成5年12月）による。）

幼児レベルでのいじめっ子といじめられっ子の大まかな型については前号（つくば国際短期大学紀要　第29・30合併輯）で取りあげている[8]。

本論では「いじめの構造」について取りあげた。いじめには，加害者であるいじめっ子，被害者であるいじめられっ子のみならず観衆や傍観者がいることが指摘されている。観衆とは，いじめを見てはやしたてる者たち，傍観者とは，見てみぬ振りを決め込んでいる者たちである。この，いじめっ子，いじめられっ子，観衆，傍観者からなるいじめの構造は，いじめの四層構造と呼ばれ，広く認められている。観衆が多ければ多いほど，いじめは活気をお

びることになり，その結果，クラスの大半がいじめに対して無言と傍観を保ち，知らないのは教師だけということも生じうるのである。

そして，村尾康弘はこのような「いじめ」の背景には，親や教師の生活態度が災いしていることを指摘している[9]。

(4) アダルト・チルドレン

このアダルト・チルドレンという言葉は，共存症と同じように，アメリカのアルコール依存症の治療現場のなかから生まれた。アダルト・チルドレンという言葉を使い始めたケースワーカーやセラピスト（心理療法士）は，アルコール依存症という騒がしい問題を抱えた親たちのもとで育った，静かで控えめな人々に見られる自己破壊的とも呼べる他人への献身に注目していた。アルコホリックの妻という厳しい立場にありながら，その座から降りることも考えもしないような女性たちの多くが，アルコホリックの娘たちだった。1980年代以降，ケースワーカーたちは，やがて彼らを ACoA（Adult Children of Alcoholic）と呼ぶようになり，彼らの抱えている問題が浮かびあがってきた。*

親が子どもに与えるストレスは，アルコール依存症に由来するものだけではない。ACoA がアダルト・チルドレン概念の原点ではあるが，斎藤学は「アダルト・チルドレン」という用語を，親のアルコール依存症の有無とは切り離して考えようとしている。そして，アダルト・チルドレンを「親との関係でなんらかのトラウマを負ったと考えている成人」と定義している[10]。

また ACoAP（Adult Children of Abusive parents）といえば「虐待する親のもとで育ち，大人になった人」で，ACoD（Adult Children of Disfunctional Family）といえば「機能不全家族のもとで育ち大人になった人」ということもできる。

機能不全家族とは，たとえば仕事依存で子どものことが念頭にない父親だとか，病気で突然の入院を繰り返す母親などがいる家族がこれに含まれる。また，暴力もふるわないが，やたらと厳しく，冷たくて，子どもたちが恐れおののいて口のきけない父親などというのもこれに属する。子どもに手を上げることはないが，夫婦喧嘩が絶えず，妻が家出を繰り返しているなどということがあれば，もちろん機能不全家族である。

この他にも，インナー・チルドレン，登校拒否，非行（ドラッグ，売春等）の低年齢化，校内暴力等の問題がある。

以上のような社会問題を引き起こす原因に家族環境（形態）が大同小異関係してくるといえる。

＊1969年カナダのトロントで Cork, M によって The Forgotten Children.（忘れ去られた子どもたち）が出版された。これが1981年以降アダルト・チルドレンと一般に呼ばれるようにになった。

3．変容する家族の形態

家族の形態は，歴史的，地理的，政治的，経済的，宗教的な影響を受けながら成立し，また変容してきた。その家族に関する研究は，心理学・社会学・文化人類学・家政学等の分野で幅広く進展されてきている。

本論は，先達たちの著明な研究の紹介は割愛し，戦後（1945年以降）の日本を中心とした家族形態にしぼり論述する。

パーソンズら（Persons, T.& Bales, R. F. The Family, Socialization and Interaction Process, 1955）[11] は最後まで家族に残るのは，パーソナリティーに関する２大機能の①子どもの社会化（socialization）と，②大人のパーソナリティーの安定化（stabilization）であることを指摘していることに異論を唱えるつもりはないし，むしろ賛同したい。しかし現代日本における家族形態は，彼らの指摘をも覆さんばかりの変容である。

戦後の日本は核家族化*は益々進展している。それは直系家族（親が一人の子どもの生殖家族と同居する）が減少し，核家族が増えてきたこと傾向にあるといえる[12]。その実態は表①に見るとおりである。

かつて戦前社会では核家族世帯が直系家族世帯を若干上回る程度であった。戦後社会では核家族世帯が増え，直系家族世帯が減少してきており，今日では核家族世帯が約60％弱，直系家族世帯が約15％となっている。また単独世帯の伸びも著しい。あわせて，ここに数値としては示していないが，単親家庭(父子家庭，母子家庭)増加も看過できない。

また青木久子は，家庭の教育機能を把握するために，団塊の世代が育った家庭（表②－１）と，団塊の世代が親になって築いたそれ（表②－２）とを比較している[13]。

Ａ氏，1948年生，地方の小都市で誕生する。兄弟姉妹８人である。

Ａ氏が育った家庭は，３世代同居で，まだ家夫長の力が大きかったので，両親の祖父母に対する気遣いや礼儀，距離の置き方，振舞い方を見て育っている。子どもから観て２世代だけではその区分が明確にみえないが，両親と祖父母の付き合い方に世代間の違いが理解されていく。また冠婚葬祭がにぎにぎしく行われるたびに親族が集まり語らいがなされるので，父方，母方の祖父母と叔父，叔母，両親の関係やその世代の人々の価値観，地域の空間的広がりなどを学ぶ。いとこ，兄弟姉妹とも年齢幅が広がっているので，全体が集まると年齢の近いもの同士の小集団ができ，その縦の集団の中で情報が行き交い，遊びが伝承されてきた。さらに，それらが友だちを擁しており，兄弟姉妹に友達が加わると集団はさらに小さく自在に変わり，時と場と相手に応じて自分の振るまいを作るとともに，そこから幅広い情報を取り入れて知識を広げてきた。

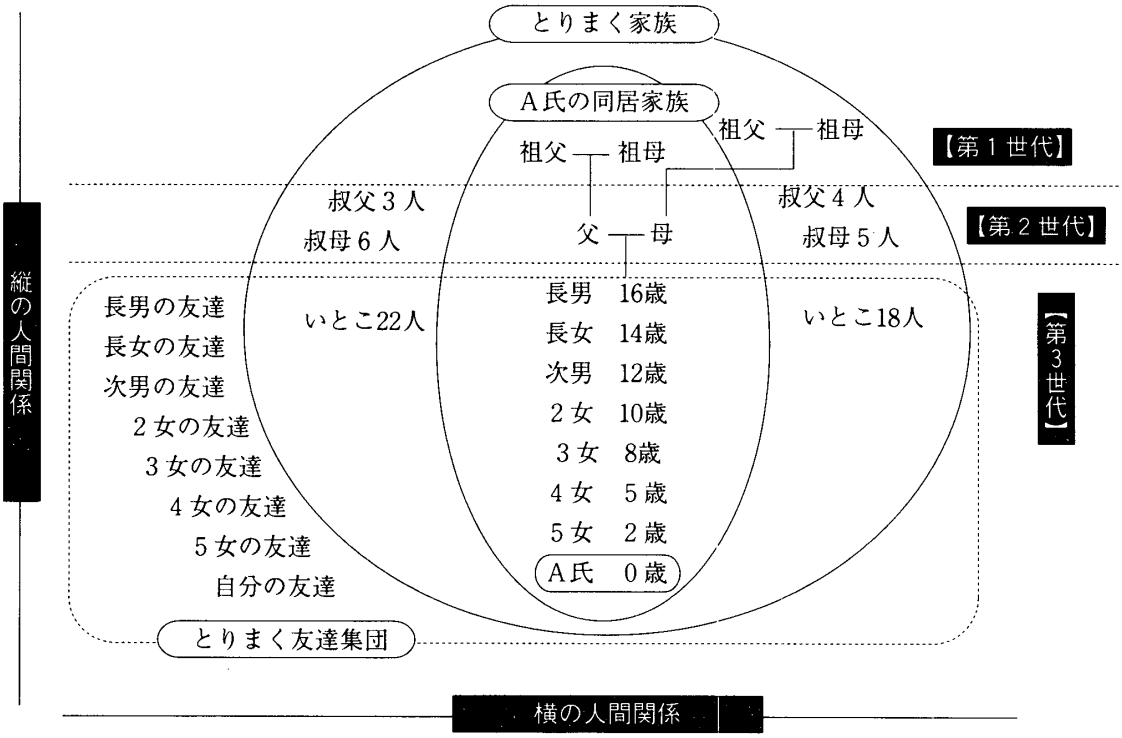
＊核家族（nuclear family）説の最初の主唱者は，アメリカの文化人類学者マードックである。彼は，その主著 Social Structure（1949）で核家族とは「夫婦と子どもからなる家族」といっている。「塩原勉他編「社会学の基礎知識」p117　有斐閣（1969)」

表１　世帯（家族類型）構成の変化　　単位：千世帯（構成比）

	大正９年 (1920)	昭和35年 (1960)	昭和40 (1970)	昭和50 (1975)	昭和55 (1980)	昭和60 (1985)	平成２ (1990)	平成７ (1995)
核家族的世帯	(54.0)	11,778 (53.0)	17,186 (56.7)	19,980 (59.5)	21,594 (60.3)	22,804 (60.0)	24,218 (59.5)	25,760 (59.4)
直系家族的世帯	(約39)	6,790 (30.5)	6,874 (22.7)	6,988 (20.8)	7,063 (19.7)	7,209 (19.0)	6,986 (17.2)	6,773 (15.6)
単独世帯	(6.6)	3,579 (16.1)	6,137 (20.3)	6,561 (19.5)	7,105 (19.8)	7,895 (20.8)	9,390 (23.1)	11,239 (25.9)
総数	(100.0)	22,231 (100.0)	30,297 (100.0)	33,596 (100.0)	35,824 (100.0)	37,980 (100.0)	40,670 (100.0)	43,400 (100.0)
人口		94,302 (100.0)	104,665 (111.0)	110,940 (118.7)	117,060 (124.1)	121,049 (128.4)	123,611 (131.1)	125,570 (133.2)
平均世帯数	4.89人	4.97		3.35	3.28	3.22	3.05	2.91

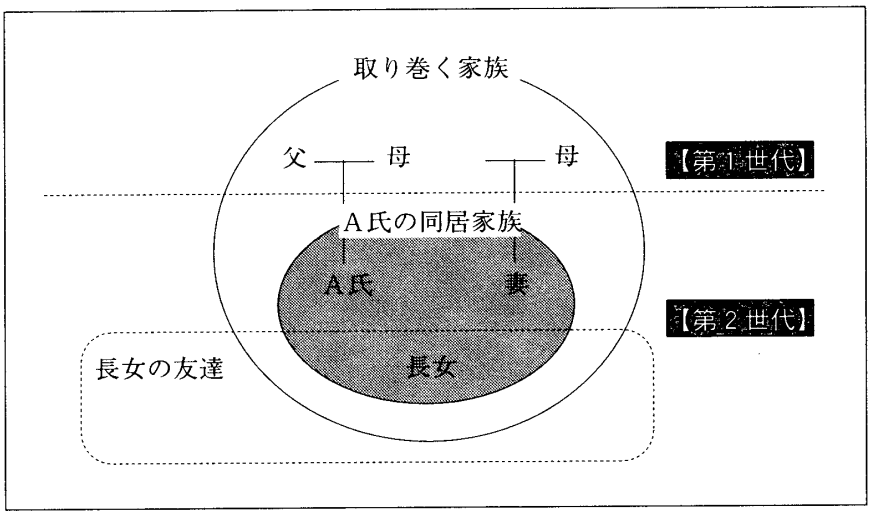
（注）１）大正９(1920)年は戸田貞三『家族構成』，ほかの年次は「国勢調査報告」より作成。
２）「直系家族的世帯」は「その他の親族世帯」である。
３）人口の（　　）は昭和35(1960)年を100.0とした指数である。
４）平成７年度平均世帯員数には兵庫県は除かれている。『厚生の指標』45-12．1998)
５）総数には「その他の世帯」を含む。

表②－１　Ａ氏（1948年生まれ）が育った家庭環境



このようなA氏を含めた団塊の世代は，多くの大家族の暮らしを通して地域とつながり同世代間の，異世代間の人間関係のつくり方や生き方，考え方，生活の知恵，職業選択の仕方などの多様性を学んでいる。

表②－2　A氏が築いた家族



しかし，都会に出て彼が築いた家庭（表②－2）は，核家族で子どもは1人である。子どもには，世代の差は見えないので親とも友達のような関係を維持していく。また家で遊ぶ兄弟姉妹がいなく，テレビやゲーム相手に遊んでいることが多い。小学生になると塾に通い，中学生になると部活動と塾での勉強を行うようになるが，同世代のかかわりが中心である。

このころは，「かぎっ子」，「積み木くずし」（家庭断裂）といったの家族問題が浮上してきた。

そして現代は，前掲の「かぎっ子」の世代を両親にもち，「団塊の世代」を祖父母に持つ世代になっている。家族構成の概容は表①の通りであるが，この変化に伴って，家事分担，余暇の利用，家族機能の外部化，個人化する家族，多様化する家族，ライフサイクル，男女平等の前進などの生活様式に変容がみられる。この環境が新たな家族問題を引き起こす要因となる。

飯田哲也はこの時期を「ポスト成長期」とネーミングして，問題現象が現れないで潜在化していることがより深刻であるという。また，その問題状況を心理的飢餓状態，主体的活動の減退，未来志向の乏しさの進行とをからませて，いつ噴火するか分からない「休火山的問題状況」とみている[14]。

青木久子もまた，おそらく，どんな家庭でも大なり小なり，急激に変化する時代の嵐に見舞われ，予想だにしない舞台に引きずり出されることだろうといっている[15]。

一方，平成13年度国民生活白書で，家族の多様化について次のような調査結果をまとめている。「結婚観や離婚観等を含めた家族間について，従来の考え方が必ずしも固執しない多様で自由な考え方をもつ人が若年層に多い事を考えると，家族に関する自由な選択可能性に対する期待が今後

高まる[16]」としていることにも危惧の念をいだいてしまう。

3．発達心理学的，教育社会学的面においての第１次社会化

社会化の一般的概念については，前掲（つくば国際短期大学紀要　No. 29・30合併輯　P５～７）したので，本論は第１次社会化のみにとどめる。

パーソンズ. Tの発達説はフロイト. Sの精神分析の影響を受けるところが大きいが，子どもの社会化をもたらす家族の相互作用の力学への関心に，独自の特徴がみられる。

古畑和孝は次のように要約している。家族は社会体系の１つであり，社会化のための特定の課題を遂行する。一般に父親は，主として道具的（経済的・課題関連的）機能を果たすのに対して，母親は，表出的（感情的・養育的）機能をはたす。この役割分化は子どもの適切な性的同一視の促進にとって必要であり，家族は子どもにとって社会的同一性を用意するものである[17]。

また，仲康らも次のような解釈をしている。

１つには，社会化の過程は平坦な連続の過程だけではなく，安定した状態には精神の危機的状態が続き，それをのり越えパーソナリティーが再組織化されることによって，より高いレベルへ到達することである。その過程は，口唇危機（oral crisis）・口唇依存期（oral dependency）・肛門位相（anal phase）というものである[18]。

エリクソンは，２～３歳頃にあたるこの前児童期に学習する基本的なことがらを自立性の獲得であるとした。この時期までのパーソナリティー構造は，母親に代表される世界と，それに対する自己という２分割の自我構造であった。それが次のエディプス期という危機状態を通過することで，４分割の構造をとり入れるようになる。幼児も３歳ぐらいになると，父親は「黒く」て「ごつごつ」しており，母親は「赤く」て「なめらか」な存在である，といったイメージを描くようになると言われている[19]。

それまでほとんど母親が行っていたしつけの世界に，家族をとりまくより広い世界の行動基準にたって家族を統率する，すなわち道具的リーダー（instrumental leader）の役割をはたす父親が登場し，母親は一歩さがって子どもの心の葛藤を和らげ，心の安定を保ってやる表出的リーダー（expressive leader）の役割を演じるようになる。このような父と母の役割分化によって，既にある父親，母親のイメージが男性役割，女性役割へと発達し，自我の構造も父親に対する男性役割，母親に対する女性役割というように４分され，次の潜在期（latency）を迎える[20]。

このように，子どもの第１次社会化にとって両親のはたす役割，とりわけ母親の役割は重要である。詫間武俊は母親の態度が子どもの性格に及ぼす影響について，表③に示している[21]。

また，現代は，父親役割が衰退し混乱しているのも事実である。ある幼稚園で，「みんなの家での生活」というごっこ遊びをした。お母さん役になった子は，喜々としてその役を演じることができたが，お父さん役になった子は困ってしまった。寝ころんで新聞を読むまねをするか，子供

表③　母親の態度と子どもの性格

母親の態度	子どもの性格
1．支配的	服従，自発性なし，消極的，依存的，温和
2．かまいすぎ	幼児的，依存的，神経質，受動的，臆病
3．保護的	社会性の欠如，思慮深い，親切，神経質でない，情緒安定
4．甘やかし	わがまま，反抗的，幼児的，神経質
5．服従的	無責任，従順でない，攻撃的，乱暴
6．無視	冷酷，攻撃的，情緒不安定，創造力にとむ，社会的
7．拒否的	神経質，反社会的，乱暴，注意をひこうとする 冷淡
8．残酷	強情，冷酷，神経質，逃避的，独立的
9．民主的	独立的，素直，協力的，親切，社交的
10．専制的	依存的，反抗的，情緒不安定，自己中心的，大胆

（詫摩武俊，1967）

にご飯を食べさせるぐらいのことしかできなかった。これは，社会の組織化と仕事の専門家分業によって，大衆には父親の具体的姿が見えなくなってしまったからだ[22]。つまり，社会化の担い手としてまた同一視の対象としての父親を，家族生活の中で発見することが難しくなっているのである。『親父の背中』という言葉がいいイメージを与えなくなり，『雷おやじ』とか『地震・雷・火事・おやじ』とういう言葉がすでに死語になりつつある。

上述した社会化論・パーソナリティーの形成については，核家族の中での典型的な養育過程の分析を基礎として構築された。ところが最近の日本においては，家族形態の変容により，従来の典型的な家族における標準的な社会化とは異なる社会化過程がみられる。

というのは，高度経済成長期以降，核家族化の進行に伴う小家族化，単独世帯の激増，労働者家族の増加と自営業家族の減少，女性就業の増加，家計の変化，高齢化の進展，離婚率の増加等の家族形態を変容させる因子が多すぎるからである。（国民生活白書等の各官公庁が発行する統計資料で明白である）

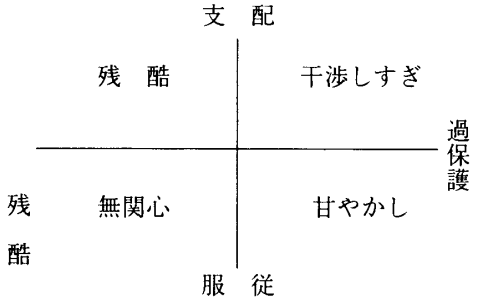
社会規範の内面化が社会化の重要な要素の１つあるが，めまぐるしく変動する現代において，その社会規範は必ずしも一定していない。このことは，子どもの社会化においても，家族構成が複雑・多様化してきていて，社会で望ましいとされる行動様式（集合表象）を身につけていくことの困難さを意味している。つまり，親の役割行動が子どもの望ましい社会化を通じて集合表象を身につけるのならば，現代の親のはたす役割行動はより重要に成ってきているといえる。然るに，その複雑化が曖昧さと混沌を生み，前掲したような家族問題＝社会問題を引き起こす要因になっている。

4．望ましい第１次社会化のための親の態度と今後の課題

幼児をめぐる社会問題，変容する家族形態，第１次社会化については，前掲した通りである。

ここで，ルソーがその著書『エミール』の冒頭で述べている，「造物主の手から出る時には，すべて善いものであるが，人間の手にかかるとそれがみな例外なく悪いものになっていく[23]。」の一節が想起される。一般的には，その最初にかかるのは母親，次いで父親である。

サイモンズP.Mは，表⑤のように，親子関係を力の関係と，愛情の関係とのふたつの次元をあげている。



人の子の親であるならば，わが子に限りない愛情を注ぎ，これを暖かく保護し，いたわり，慰めて，援助の手を惜しまないのが普通の親である。また，こうしたこうした愛情だけを注ぐだけが親ではない。子供が家族の一員として，また社会の一員として生活していくのに必要な態度，行動，習慣を教えしつけていくための必要な統制もこれに加えていくのが親である。子の愛情と統制を子供に与えていく姿は，ある意味では本能的といってもよいくらい普遍的に見られる親の姿である。このような親がいるからこそ，家庭は子どもに対して，保護と社会化という重要な機能を果たしているとも言えるのである。そしてサイモンズによると望ましい親の態度は，子の両関係において中間の位置を占める態度であるといっている[24]。

ケネス・ケイ[25]は，０歳児に対する親の話し言葉について，次のように言っている。母親が赤ちゃんに語りかける回数は，１年間に50万回に達する。これは１時間に100回話しかける割合になる。赤ちゃんは目，耳に入るすべての外界の刺激に鋭敏に反応しているという。だから，分からないだろうと思って汚い言葉や無意味な話し言葉を繰り返し投げかけてはならない。

ところが，現代社会においては，上述したような親の子どもに対する態度が多様化され，さらには家族の問題が社会問題にまでなっている。

「できちゃった結婚」がなかば容認され，母親がパチンコに夢中になり，車の中にいた幼児を熱中症で死なすという事件や事件までいかないが，幼児に害があると知りながらも喫煙や飲酒を止めない母親，さらには自分が遊ぶために託児所に子供を預ける母親など，母親としてのモラールの無さが目立つ昨今である。「母親予備軍」もまたそれ以上かもしれない。突き詰めれば，彼らの親にも責任があると思われる。つまり，このような現象（傾向）が起きる要因は，1960年代の高度経済成長期に芽生えたともいえる。

高度経済成長期より，テレビをはじめとするマスメディアには情報が氾濫し，また視聴率アップのために各局はなりふりかまわず番組を制作する。メディアが大衆のニーズを先取りし，さらにモラールの牽引車的様相を呈している。

便利さを追求するあまり，安易な行動にはしりがちになってはいまいか。

また，付属保育園の園長が『しつけは指導できるが，（本来親のもつ）愛情のかたがわりはできない。』と言っていたことが，より深刻な現実なのでもある。

そんな中で，単身家族の増大，少子化による家族規模の縮小など個人にとって，また社会にとっての家族そのものの意味が問われている。さらに，社会問題化している高齢者の増大に伴う諸問題，中高年の離婚等の，新たな問題状況が出てくる中で「家族と子供の社会化」の条件についての調査・研究の急務を感じる。

さらに，幼児教育とともに，国家的規模で，地域社会に密着した社会教育での「親の教育」を提唱したい。

現実，義務教育機関が福祉的機能をも担ってきている中で，親より一緒にいる時間の長い幼児教育機関にはさらにその要請が高まってきている。外部集団の関与の限界はあるものの，子供との心かよわせる保育の中で，しつけを中心とした社会化の援助者にはなりうるはずである。

そのためには，幼児教育機関においても，複雑・多様化する家庭環境の把握と幼児１人ひとりのきめ細かい保育体制の研究・遂行が必要である。

ルソーに限らず，その時代時期の現実と理想のギャップに対して，ソクラテスの時代から良心と勇気と理想を兼ね備えた先見性のある人々によって問題は提起され，改善されてきた。そして現代においても，現状に深い洞察のメスを入れ，ポジティブな姿勢で問題の究明・解決に努力している人々が少なからずいるのである。事実，小泉純一郎内閣発足時には「待機幼児ゼロ作戦」を掲げ，積極的に幼児教育に取り組む姿勢を見せている。

５．あとがき

家族研究には，R.ヒルが識別した５つ（制度的・構造＝機能・相互的・場・発達）のアプローチのほかに，形態的アプローチがあり，各々のアプローチには一長一短があると森岡清美は言っている[26]。

本小論は，「第１次社会化」を副題として，総合的に考察を試みたものである。

団塊の世代を祖父母にもち，「かぎっ子」・「積み木くずし」の世代を両親にもつ現代の子どもにみられる特徴は，幼児特有の好奇心が乏しく，飽きっぽく，自己中心的なところが目立つ。

ベネディクトは『菊と刀』の中で，西欧の「罪の文化」に対して，日本を「恥の文化」と称して日本人の行動様式を分析している[27]。こうした文化的面は，しつけに特に強く反映されるものと考えられる。現代の親はいったい恥という外面的基準と罪という内面的基準を持ってしつけをしているのだろうか。

そこで，今後は意識調査と事例を併用した家族の研究をすすめていきたい。

そして，望ましい第１次社会化が，現代の日本における望ましい集団表象のためになされるものだけではなく，世界を視野に入れた，生涯にわたっておこなわれる社会化の過程の大事な一歩

にしなければならない。

引用文献

(1) 仲康・岩内亮一　共著　「教育社会学」p18　慶応義塾大学出版会（1989）

(2) 江渕一公「社会化研究への提言」『教育社会学研究　第31集』P81～82東洋舘（1976）

(3) 真田是著「資本主義社会と社会問題」汐文社（1972）

(4) 村尾康弘著「家族臨床心理学の基礎」P62～66　北樹出版（2001）

(5) 小島一夫「現代社会における幼稚園教育についての教育社会学的一考察」つくば国際短期大学紀要　No.29・30合併輯　p9（2002）

(6) 村尾康弘著「家族臨床心理学の基礎」P67～74　北樹出版（2001）

(7) 小島一夫「現代社会における幼稚園教育についての教育社会学的一考察」つくば国際短期大学紀要　No.29・30合併輯　p9～10（2002）

(8) 村尾康弘著「家族臨床心理学の基礎」P74～84　北樹出版（2001）

(10) 斎藤学著「アダルト・チルドレン」と家族　p80～81　学陽書房（1996）

(11) 塩原勉他編・塩入力「社会学の基礎知識」p48　有斐閣（1969）

(12) 大場牧夫他共著「改訂・子どもと人間関係」（新保育シリーズ）p35～37　萌文書林（2000）

(13) 青木久子他共著「教育学への視座」（新しい教育原理）p139～140　萌文書林（2000）

(14) 飯田哲也著　「家族と家庭」P74～82　学文社（1994）

(15) 青木久子他共著「教育学への視座」（新しい教育原理）p137　萌文書林（2000）

(16) 「国民生活白書」第1章　http://www5./j-j/wp-pl/wp-pl01/html/13105200.html　平成13年度　総理府（2001）

(17) 東　洋他編・古畑和孝「心理用語の基礎知識」p228　有斐閣（1973）

(18) 仲康・岩内亮一　共著「教育社会学」p39　慶応義塾大学出版会（1989）

(19) 斎藤耕二他編・深谷和子「社会化の心理学」p187～188　川島書店　（1974）

(20) 仲康・岩内亮一　共著「教育社会学」p40～41　慶応義塾大学出版会（1989）

(21) 森上史朗他編著「保育内容　健康」（演習保育講座6）P48　光生舘（1996）

(22) A・ミッチャーリーヒ著「父親なき社会」小見山実訳P294　新泉社（1972）

(23) ルソー.J.J「エミール」P23　今野一雄訳　岩波文庫（1962）

(24) 大竹誠著「家庭教育の心理学」p61～62. P85～87　学芸図書（1964）

(25) ケネス・ケイ著「親はどのようにして赤ちゃんをひとりの人間にするのか」鯨岡峻・和子訳　ミネルヴァ書房（1993）

(26) 塩原勉他編・森岡清美「社会学の基礎知識」p163　有斐閣（1969）

(27) 塩原勉他編・柴野昌山「社会学の基礎知識」p290　有斐閣（1969）